

完全犯罪であることの証明書

贋作シャーロック・ホームズ会

会員 小 倉 直三郎 作

(1)

シャーロック・ホームズ宛の一通の封書が届いた。発信人はロンドン市郊外の刑務所の一囚人であった。長らく探偵業をつとめているホームズにとつて、刑務所に服役する囚人から事件の依頼を受けるのは、始めての経験であった。従つて興味津津たるものがあつた。封を切りその半ばを読んでいる時、僚友ワトスンが事務所に入つて来た。颯爽としたいでたちである。手紙からチラリと視線を移したホームズは、例の調子で語りかけた。

「ワトスン君、今夜のリグナーを偲ぶ音楽会が、中年男をそんなにワクワクさせるとは、意外の極みだね。せいぜい楽しんでくるんだね」

「又例の君の悪い癖が始まつたね。一寸は推理の世界から離れられないものか。私か久方ぶりに理髪代を奮発して、おめかしをしたからと含言つて、今

夜の音楽会に出掛けると何故判つたのか……つて質問して欲しいのだろう」

「君と僕の間で純理の自慢話としても、始まるまい。然し君が率直に尋ねるのなら、回答しなくてもないがね」

「えらく勿体ぶるんだね」

「理由の1、君がそんなにおめかしするのは、気の張る場所に出掛ける為である。

理由の2、めつたに履かないその黒いエナメル靴は、君の最大の趣味であるクラシック音楽会の為の専用でなかつたのか。

理由の3、現在ロンドンではワグナーを偲ぶ音楽会が、マニアの間で大評判になつている……

これらを総合判断すれば、音痴の私にでも直ぐに考えつくと言ふものさ」

「まあ、そんな所だるうて。世界のシャーロックキアンは、この僕が大のワグナー・ファンであることをよくご承知だから、その推理は大した評価はいただけないと思ひ給え。それはそうと、誰からの手紙なのだ。えらく真剣な顔つきから推理すれば、ホームズ先生久方ぶりに登場という難事件の依頼かい？」

「まあ、そんな所だ。君も一度目を通して呉れ給え。その為に若か音楽会に遅れても、責任は持たないがね」

読み終えた二人は顔を見合わせた。

(2)

ホームズに來た手紙の内容は次の様な文面で始まっていた。

「尊敬する世界一の名探偵シャーロック・ホームズ先生へ

私は現在ロンドン郊外の刑務所に殺人罪で囚われている一囚人であります。逮捕されたその日から、私は日夜地獄の苦しみを味わっております。先生の推理をもつて、私のこの苦しみを解明していただき、心安らかに死刑台に登りたいと存じております。非礼を省みず、この手紙をしたためました。・」

「つまり無実の罪を晴らして欲しいと言うのでは無い訳だね」

「そうなんだ。依頼人は自分の犯した殺人行為は、今でも完全犯罪だと確信している。従つて自分が逮捕された理由を知りたくて仕様が無いのだ。言わば完全犯罪であつた事を証明して欲しいと言っているのだ。ワトスン君、この手紙の事はこの位にして、ぼつぼつ音楽会に出向かないと、折角のオシャレが無駄

になつて終うよ」

ワトスンは手紙を机の上に放り投げ、脱兎の如く表に飛び出した。

(3)

殺人犯人即ち完全犯罪の証明の依頼人は、トムといつ名の38歳の男で、殺されたのはイーストという45歳の男である。二人は同じ寒村の出身で、しかも幼なじみであつた。トムは20歳の時、青雲の志を抱いてロンドンに出て來た。行く当てもなく、通りがかつた不動産業を営むチャーチという者の店に転がり込み、その店員として働くことになった。主人のチャーチは近所でも評判の吝嗇家であつたが、何んの因果か農村出身のトムが気に入って、次第に重用するようになった。勿論トム自身も主人の愛雇にこたえるべく、誠心誠意仕事に励んだので、2、3年の内には店の一番番頭として、重宝がられたのも当然である。それに加えて主人のひとり娘ジェーンがトムに思いを寄せ、將來は結婚しようと考えていた。

そのような時に幼なじみのイーストがトムを頼つて、ロンドンにやつて來たのである。イーストもチャーチの店で働くことになった。トムの口添えのお陰

であったことは言うまでもない。トムは180cmを超す長身で明朗かつ積極的な好青年であり、一方イーストは160cmの短身、体格はガッチリ型で無口かつ実直相に見える青年であった。

その後この二人が終生の仇同士になるとは、誰一人想像出来なかったであろう。イーストが外見とはまるで違った悪人であった事が、悲劇の始まりであったのである。

或る日トムが店の大事な取引の契約書を紛失するという失態をしでかした。トムとすれば取引を終えて店に帰り、確かに机の上に契約書を置いた筈であるのに、無くなっていた。もつと正確に言えば、トムは次の用件を済ませて帰つて来た時、直ぐにその紛失に気付いた訳でなく、店の金庫に入れた記憶もない。誰かが持ち去つたに違いない。期限が決められている取引なので、新たに契約書を作りなおす余裕はない。店に甚大なる損害を与えて終つた。外部からの犯行とすれば単なる紙切れに過ぎない契約書より、机の引出しに入れてあつた小銃銭の方に価値があつた筈で為る。その日以後主人チャーチのトムに対する態度が一変した。しばらくすると娘ジェーンが次第によそよそしくなつて

来た。トムとすれば原因は全て自分の失態にあると考え、耐えられるだけの辛抱はしたのである。只ジェーンの豹変ぶりが納得出発なかつたので、或る日本人に聞かされた。その回答は

「私は貴方を信用出来ない。私との交際は断る」

というつれないものであり、その理由を頑して答えて呉れなかつた。このような状態ではこの儘勤め続けるのが、トムには苦しくてたまらず、遂に辟表を出して店を去つて終つた。

「どうしても店を止めるのか？」

「君が見ての通りだ。ご主人は私に口も利こうとしない。今まで私がしてきた仕事は君の方に回つてしまった。君に文句を言う訳ではないが、毎日が針の筵なんだ」

「お嬢さんの事はどうする？」

「もうそのことは言わないで呉れ。私さえ店を止めれば万事納まるのだ。君は店に残つて、私の分まで頑張つてくれ給え」

目の前で退職をなんとか止めようとする幼なじみが、まさか彼を失格させるワ

ナを仕掛けた犯人だとは知る由もない。それがトムに判る迄には20年の長い歳月が必要だったのである。

(4)

トムは失意の内にフランスに渡った。幸いカレーの町で或る薬品会社に職を得て、今では筆頭役員の地位にあつた。勤務会社の用件で久方ぶりにロンドンに出張した時、或る人からチャーチの店の状況を耳にした。イーストはジェーンと結婚、店の主人に納まったとの事。今では業界一の不動産業にのし上がつていた。然しイーストの評判ほ芳しいものではなかつた。結論を言えばイーストは先天的な利己主義者で、他人の幸福を妬み、ライバルの存在が我慢ならない人間であつたのである。店が自令の物になつたとたんに、本性を現し始めた。先ず義父のチャーチを冷遇した挙げ句、店から追放した。妻ジェーンとの夫婦生活は惨憺たるものであつた。二人の間に子供は出来なかつた。一見朴訥に見えるイーストは、始めての客には好印象を与え、彼が誠実な実業家であると思わせ、取引は順調に進展するが、一年も経てばその強欲さが判つてきて、離反してゆくのである。然し世間は広い。新規の客は後を絶たない。業界では取引上血も涙もない人間だと定評されても、事業そのものは発展を続けた。イ

ーストが次第に財産を築き上げるにつれて、その財力に媚を売る者も出る始末で、今では業界のトップにのし上がつていた。

このようなイーストの事業遍歴はトムにとって、どうでも良い事であつた。トムが激怒したのは妻のジェーンに対する仕打ちであつた。愛情の無い夫婦生活に絶望したジェーンは、今では家から一步も出ることなく、言わば半病人の状態でであると聴き、イーストに対する憎悪は爆発した。矢も楯もたまらずトムはジェーン家を訪問することにした。

豪勢なイースト家の玄関に立ち、名刺を渡し奥さまに是非お目に掛かりたいと申し出た。応接間に通され暫く待っていると二階から、女中に抱えられて痩せ細つた女性が降りて来た。見る陰もないジェーンその人であつた。

「お嬢様いやジェーンさん。随分御無沙汰致しました。このトムを覚えていらつしやいますか？」

ジェーンは寂しく笑つてうなづいた。トムはなつかしさの余り、涙を抑えることが出来なかつた。

「お父さまはお亡くなりになつたと伺いました。イースト君は盛大に事業をな

さつておられるとか、おめでとうございます」

トムは思わず出た挨拶がジェーンに対して皮肉にならないかと後悔した。約一時間ばかり二人は昔話にふけったりと言つてもしゃべるのは専らトムの方ばかりで、ジェーンは只うなづくばかりであつた。女中が娘女の身を気使つて、迎えに来たのを機に、トムは再会を約して屋敷を出た。ジェーンには名刺の裏に、現在逗留しているホテル名と電話番号を書き入れて手渡した。広々としたイースト邸の庭を歩きながら、トムは薄幸のジェーンの事を思い続けた。然しこの時においてもトムはイーストの殺害を計画する考えを持つてはいなかつたのである。

(5)

長々と説明したこれらの話は、依頼者トムの手紙の一部なのである。

「ホームズ君、トムの殺人動機が普の愛人の為だとしたら、何んだか薄弱だと思えるのだがね」

「実はそれだけではなかつたのだ」

「他にも理由があつたのかい？」

「左様、一つはかつての恋人の為、もう一つは自身の復讐の為だつた」

「まわりくどい表現は止めて、直裁に願いたいものだね」

「そうしよう。君が音楽会に遅れまいと飛び出したので、トムの手紙の前半しか読んでいない。彼は後半の部分でイースト殺害が如何に正しかつたかを力説している。トムが店の大事な契約書を紛失した件も、ジェーンが急によそよそしくなつた事も、全てイーストの仕業だつたのだ」

「そりゃ酷い話だ！トムはどうしてそれを知つたのだい？」

「ジェーンに決まつてるさ二度目にトムが彼女に会つた時、病身の彼女が渾身の力を振り絞つて、長い手紙を書いて渡したらしい。ジェーンは結婚間もなく夫の人間性に気付き始め、夫婦の間の溝は次第に深くなる。二人の間に子供は無いと言つていたが、むしろ二人の間に子供が出来ないと言ひ直すべきだ。ジェーンは結婚数日後、身体の変調に気付き、医者 of 門を叩いた。そして夫から悪性の梅毒を移されていることを知らされた」

「・・・・・・？」

「ジェーンがトムに対し急に冷たい態度を取り出した原因は、父娘がイースト

から決定的な書類を見せられた為なのだ。その書類とはトムがいかがわしい商売女から悪い病気を移され、医者適いをしているというものであった。父娘に対しイーストはこんなことを言ったらしい。友人の悪口を告げるのは心苦しいが、お嬢さんの将来を考えると、黙っている訳にはゆかない・・・とね。父親チャーチはこれを聴いてトムに対する信頼を捨てたのであって、契約書の紛失は二の次だったのさ」

「酷い話じゃないか！でも一寸待って呉れホームズ君、イースト夫婦の間に子供が出来ないのだと君は先程強調していたが、何か意味があるのかい？」

「流石我が友ワトスン君だ。悪い病気を貰っていたのはトムじゃなくて、イースト自身だったのだ。それをあたかもトムの事の様に嘘をついたのだ。多分イーストは、医者に対しトムの偽名を使っていたに違いない。自分の体験をネタに使ったのだから、さぞ迫進力はあつただろうさ」

「下劣な野郎だなあ！すると契約書の件もイーストの悪芝居か！」

「そうだろう。度重なる夫婦喧嘩の末、ジェーンに問い詰められてイーストは契約書を隠した事を白状している。ワトスン君、もう一つ問題が残っている。

父親チャーチの自殺の事だ」

「ええっ！自殺したのか！」

「そうだ。イーストから店を追い出されて間もなく、みすばらしいアパートの一室でチャーチは、おのが手首を切って自殺したとされているが、ジェーンは父報の死因に不審を持っている。それも夫イーストが関係してはいないかとね」

「話がだんだん横に広がって行くではないか。トムの殺人動機は判ってきたけれど、父親の自殺まで絡んでくるとはねえ」

「ワトスン君、そのことは私が一人で調べて置いたのだ。君もよく知っている。警部に当時の書類を見せて貰ったのだが、腑に落ちないことがある。左利きのチャーチが自分の左手首をカミソリで切って死んだとある。全く不可能なことだが、事件は余りに古く当事者たる二人がこの世の人ではない。今からこれを詮索しても始まらない。それにトムが私に要求しているポイントは、自分の犯した殺人事件の解明なんだからね」

「うん、そうだ。そうだ。トムは自己の完全犯罪を解き明かして呉れと言っているんだっただ」

「そこで殺人動機等は暫く置くとして、いよいよ本題に入るとしようではないか。ねえワトスン君」

〔6〕

「ホームズ君、トムはロンドンを去って、フランスのカレー市で薬品会社に入り、成功したと言ったね。まさかイーストの死は毒殺ではあるまいね」

「君らしくない推理だ。毒殺でなく、プロの殺し屋を使った銃殺だったよ。しかも最も巧妙を極めた囑託殺人なんだ。君は16年日本で行われた三浦和義という男の事件を覚えているかい。元の愛人と妻とを保険金目当てで殺した所謂口疑惑事件だ。トムの考えた完全犯罪も或る点ではよく似ていると言える。

勿論三浦という男は実行段階でいくつものポロを出して、現在入獄中なのだが彼の犯罪哲学そのものは、一考の余地がある」

「もつと具体的に話して呉れないか」

「ではここにAとBという人間が居ると仮定しよう。AはCという人間を、BはDという人間を殺してやりたいと考えてる。その時AとD、BとCは何んのつながりも無いとしたら、A・Bが共謀して何のゆかりもないC・Dを交換殺

人するのだ。さすれば完全犯罪は可能だ・・・とオリエントの日本人は確信していた。この広い地球で、動機はおろか何の接点もない、行きずり殺人を暴くことは不可能と言うのだ」

「では、その三浦が逮捕されたのは理屈に合わないじゃないか」

「二浦というのはダメ男さ。この交換殺人を不用意に、寿司職人を始め数人の者に持ちかけたり、自分の妻を自分の愛人の手を借りて殺そうとしたり、全く話にならない愚か者だった。遠い東洋の事件はさて置いて、トムは数人のプロカーの手を通して、リビヤからプロの殺し屋を雇い、イーストを殺害せしめた。殺し屋は痕跡一つ残さず逃走した。トムはその殺し屋の名も顔も知らない。この二人がロンドンの街角で出会っても、無縁の者同士として、すれ違いに行き過ぎて終うに決まっている。トムは殺人のアリバイ作りに苦労する必要もない」

「一寸待ってくれ。トムは殺されたイーストの妻ジェーンを二度も訪問している。それにご丁寧にホテルの名や電話番号を書いて、彼女に渡しているじゃないか」

「警察は現にトムを参考人として数回尋問をしているよ。ワトスン君もよく知っている殺人課スミス警部が、この担当なんだ。テレビのコロンボ警部クラスの腕利きの猛者たるスミス警部は、一応の調べをしたが、単に昔の友人ということだけで、手の打ちようもあるまい。ジエーンも尋問を受けたが、その証言もトムにとつて、どうつてことは無い」

「では、トムが完全犯罪であつたと言うことかい。それなら何故トムは逮捕されたのだい？」

ワトスンの言葉にホームズは答えず、腕を組み続けた。時計がウエストミンスター寺院の鐘に似た音で夜の11時を告げた。

(7)

「ホームズ君、君はトムに対し何んと回答するつもりなのかね？」

「そうだねえ、今晚徹夜で手紙を書くつもりなんだが、君の殺人計画は完全犯罪だつたとしても書くことにするか」

「冗談じゃない！馬鹿も休み休みに言うものだ。完全犯罪ならトムは何故逮捕されたのだ。それでは答えになるまい」

ホームズは皮肉な笑みを浮かべながら答えた。

「ワトスン君、もう一度言おう。私はトムの犯行は完全犯罪だつたと回答する。但し末尾に次の一文をつけ加えて置くつもりだ。(あなたはスミス警部に逮捕されたロンドン空港での出来事を、もう一度ゆっくり思い出してご覧なさい。さすれば君の疑問は解明されるに違いありません。)・・・とね。後はトム自身が答えを出せばよいのだ」

(8)

これでこの事件に対するホームズの推理はお終いである。が然しこれでこの一編を終れば、この拙い小説？を読んで呉れる方々から、袋叩きの制裁を浴びることになるろう。そこでトムがホームズの提言通り、獄中において逮捕された日の出来事を、努力して次の様に思い出し、自分の疑問を解明したのではないかと推論した結果を書いて置く事にする。

「私(トム)は計画どおりイースト殺しに成功した。後日の証拠にならぬよう殺人プロカーヤ殺し屋からの連絡は厳禁してある。予て示し合わせた通り、私は或る新聞の夕刊に載った次の広告文を見つけることで、殺人の成功を知つ

たのである。

「ツタンカーメンはピラミッドに登った」

私はこれで思い残すことなく、ロンドンを去ることが出来る。内心の得意さを顔に出すことなく、悠々と空港に到着、出国手続きに取り掛かった。気がかりと言えばジェーンの身の上である。然しそれも今暫くの辛抱だ。私の妻と二人の子供は彼女を私の別荘に迎え、老後の世話をすることに大賛成して呉れるに間違いは無い。皆んな温かい心の持主なんだ。ジェーンには今夜9時の便で発つと連絡して置いたが、あの体では見送りは到底無理であろう。さあ、もう二分もすれば、搭乗が始まる。私は腕時計に目をやり何気なく辺りを見回した。その時である！向こうから数回尋問を受けたスミス警部の姿を見つけた！警部の様子が只事では無い！形相を変えてこちらに走って来るではないか！そんな筈は無い！落ち着け！犯行がバレル道理は無いんだ！ここで下手にまごつけば、折角の苦心も水泡に帰す。私の心臓は早鐘の様に鳴り出した。平気な顔をしよう。警部は他の用件で空港に来たかも知れないではないか！でも、やはり変な具合だ。警部はやっぱり私の方に向かってやって来る！しかも顔面は蒼白、

ただ事では無い！警部は私の前まで来て、腕をムンズと掴んだ。もう駄目だ！私は思わず警部の腕を振り払って、逃げ出した！警部は私を後ろから羽がいしめにした。私は床に押し倒されても必死にもがきながら、声を振り絞って叫んだ！

「警部さん！イースト殺しが私の犯行だと、どうして判ったのだ！」

（終章）

ホームズとワトソンは南の温かい陽射しを浴びながら、机の上のポージョレ・ヌーポの栓を抜いた。

「ホームズ君、君が言っていた日本の三浦和義事件だがね、少し調べて見たんだ。奴は悪い男だね。見も知らぬアメリカ人の通り魔に妻は殺されたのだと、大統領に抗議文を送ったり、米軍機で妻を送還させたらしいじゃないか。時の悲劇の人として大衆の同情を集めたとも書いてあった」

「やり過ぎなんだよ。皆んなから脚光を浴びたいという汚い欲望が、墓穴を掘

ったのだ。若し一市民として静かに深く潜行していたら、三浦の犯罪は発覚しなかったのではなからうか。恐ろしい事だ。私は三浦は死刑を宣告される方に賭けるが、どうかね50ポンド？」

「僕は懲役つ200年が相応しいと思う。どちらにしても生さず婆には出られまい」

「今年のヌーポは出来がいいね。ああ、それからトム的一件だが、この間スミス警部に会ったら、奴さん驚いていたよ。夫の死を知り、世をはかなんだジェーンが自殺した事をその夜、帰国するトムに知らせせやろうと、飽くまでも好意で駆けつけただけなのに……ってね。悪いことは出来ないものだね。ワトスン君」

二人はボジョレ・ヌーポの何杯目かの乾杯を行った。

終わり